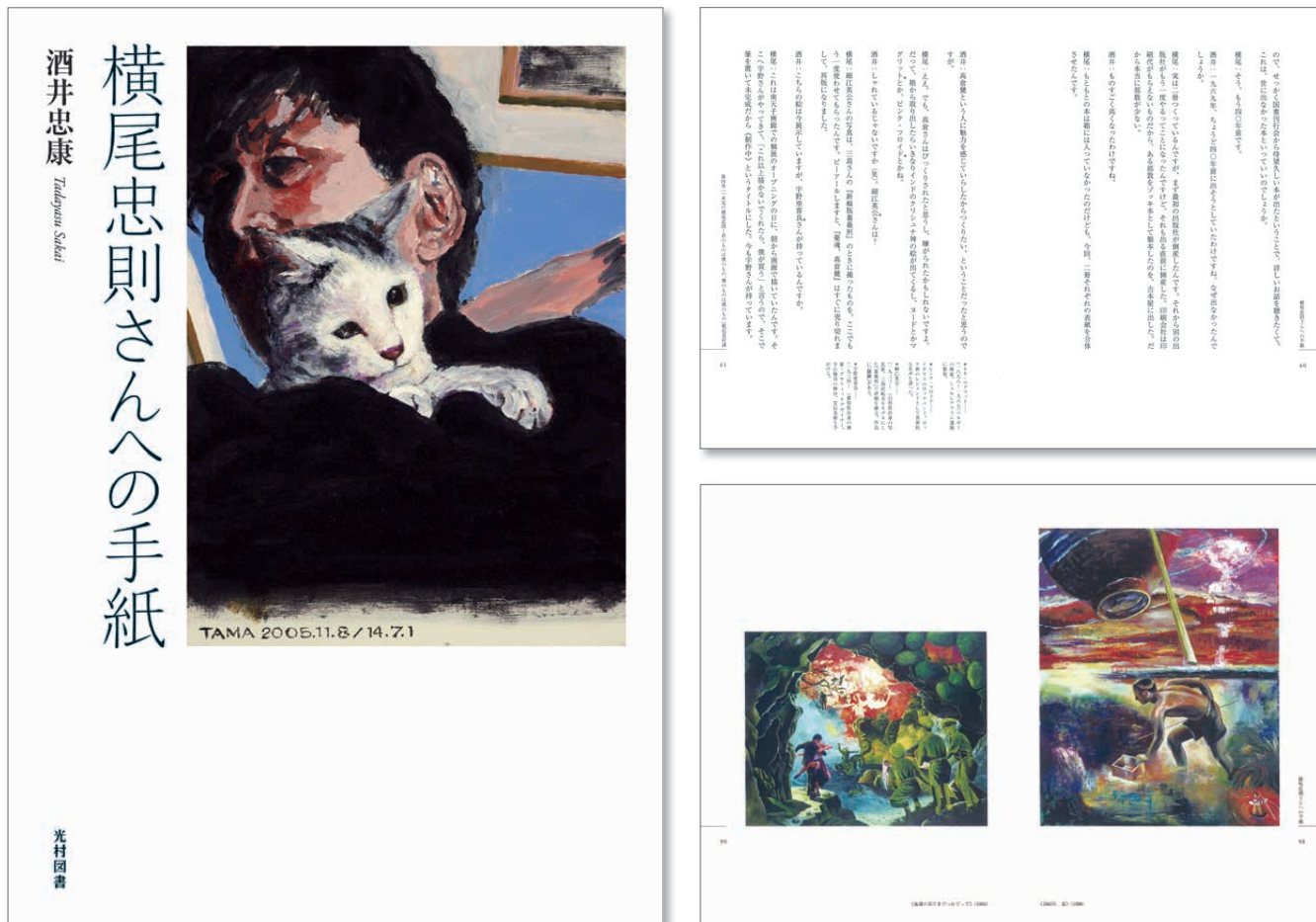


新刊のご案内



『横尾忠則さんへの手紙』

酒井忠康著 光村図書出版 2019年10月18日発行
本体2,000円＋税

世 田谷美術館館長・美術評論家の酒井忠康氏が、展覧会図録や新聞記事、書籍等に発表した数々の文章・対談から厳選し、1冊の本にまとめました。裏話的な話題だけでなく、美術評論家という立場で、難解ともいわれる横尾忠則氏の作品を紹介し、愛情をもって論じています。

旧知の間柄である画家へ、酒井忠康氏からのエールともいうべき読み応えのある1冊。横尾忠則氏の作品はもちろん、氏のアトリエなどもカラーで多数紹介しています。



旧知の間柄である酒井忠康氏(右)と横尾忠則氏(左)。(写真・加藤絢)

上／酒井忠康氏と横尾忠則氏の対談
下／横尾忠則氏の作品「地球の果てまでつれてって」「1945年、夏」

美術準備室 No.16

2019(令和元)年10月25日

発行人 ■ 小泉 茂
発行所 ■ 光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
電話：03-3493-2111
www.mitsumura-tosho.co.jp
E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp
デザイン ■ Better Days
(大久保裕文+深山貴世)
印刷所 ■ 株式会社 加藤文明社



光村図書



← 詳細はこちらから。



本誌は、文部科学省による「教科書採択の公正確保について」に基づき、(一社)教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」にのっとって配布しております。

アトリエ 訪問

第 16 回

富田菜摘

美術家

耳がスプーンのサル、胴体が空き缶のコウモリ、鼻がトランペットのゾウ——。さまざまな廃材を組み合わせ、動物をはじめとするユニークな立体作品を生み出す富田菜摘。ときに2メートルを超える作品も手掛ける彼女のアトリエは、意外にも、一般的な戸建て住宅の一室だった。

撮影 永野雅子





家のいたるところに飾られた大小さまざまな作品。その一つ一つに名前が付けられている。

外観は、ごく普通の住宅。扉を開けると、玄関横に置かれたカメレオンのオブジェが目飛び込んだ。よく見ると、胴体は扇風機のカバーでできている。「作品の保管場所がないので家中に飾っているんです」。部屋に足を踏み入ると、ティラノサウルスやフクロウなど、さまざまな生き物たちが招き入れてくれた。

——ご自宅の一室で制作されているんですね。

富田 アトリエと住居が一緒のほうが創作がはかどるんです。アトリエだけならもっと広い物件もあると思うんですが、身近な生活廃材を使っているの、生活の一環としてつくっているほうがバランスが良くて。

私の場合、生活と創作の境界線は、あいまいなほうがいい。制作中に材料が足りなかったら、家の中を歩き回って、使えそうな材料を探します。台所からスプーンを持ってきて、まだ使えるのに材料にしてしまったこともあります（笑）。

この家には、最近引っ越してきま



棚にはさまざまな廃材が並ぶ。廃材は、個展の会場で来場者に譲ってもらうことも多いという。

した。近くにお気に入りの園芸用品店があって、息抜きに植物を見に行くと元気が出ます。

——いつから廃材を使って制作されているのでしょうか。

富田 美大受験の予備校に通っていた高校3年生の頃です。自由課題で、金属廃材を使ってガラパゴス諸島に生息するウミイグアナをつくりました。大自然の動物を、それとは対極にある都市の廃材を使って表現することで、自分なりに環境へのメッセージを込めたいと思って。進学した美大では油彩画専攻だったのですが、結局一度も油彩画を描かず、立体ばかりつくっていました。

思えば、素材へのこだわりは、小学生の頃からあったのかも。夏休みの課題で、カボチャの繊維から紙をすいて、その紙でかぼちゃ型のランプをつくったことがあったんです。何かをつくるとき、何の材料を使うのが一番いいんだろう、という視点はその時からもっていたんですね。

今、雑誌や新聞を使った人物の立体もつくっているのですが、サラリーマンには新聞紙、少年には少年漫画雑誌、女子大生にはファッション誌と、つくる人物によってメディアを使い分けています。

——作品に使う廃材は、どのように選ぶのですか。

富田 基本的に設計図は書かないので、作りながら考えます。私はどの作品も、顔から作り始めるんです。顔ができると性格や性別などが感じられるようになるので、それに合わせて体の動きや形、色などを考えながらつくっていく。ストックしている廃材がたくさんあるので、最適なものを選び、つなぎ合わせていきます。逆に、廃材の形から何を

くるか発想することもあります。

制作では、ペンチや電動ドリル、金切バサミなどを使います。ときには、固い金属を何度も折り曲げて金属疲労で切断することも。溶接はせず、小さな穴を開け、針金で一つ一つつなぎ合わせていきます。

——富田さんにとって、廃材の魅力とは何でしょうか。

富田 廃材には、その物が今までにたどってきた歴史があります。例えば金属だと、表面の「錆」がすごくきれいだと思っていて。その廃材がどこで、どんなふうに使われていたかという物語が、錆や色あせ、傷となって刻まれているんです。そういった新品にはない味わいがロマンチックだなと。自分で金属を焼いて風合いを出すこともありますが、天然の錆には勝てません。

身の回りの生活道具は、日々変化しています。扇風機なんかも、羽のないタイプのものが出てきていますよね。今はあたりまえのように思える身近な生活道具も、数年後は全く違う形をしているかもしれない。だからこそ、時代とともに変化していく物の形を、作品に組み込んで残していけたらいいなと思っています。



とみた・なつみ

1986年東京都生まれ。2009年、多摩美術大学絵画学科油画専攻卒業。金属廃材を使った動物や、新聞紙や雑誌を素材にした人物など、身近な素材を用いてユニークな作品を制作している。最近の個展に、絶滅した恐竜や動物たちを廃材で表現した「富田菜摘展 LOST WONDERLAND」（Bunkamura Gallery, 2019年）など。



錆は、きれい。
物語が
そこに刻まれているから。」